

陽の
当
たる
坂
道

臼
井

淳
一

片田舎の農家のお家騒動

片田舎の茅葺屋根のおんぼろ屋敷に、部屋の仕切戸と壁を境に二世帯の家族が生活していた。一方に私たちの家族六人が、他方に父の祖父夫妻と父の実弟（二五歳）を含めた五人家族が別々に暮らしていた。父は、神奈川県のお官職に就いていた。祖父の家族は農業を生涯（なりわい）としていた。

お家騒動は、父の祖父が昭和二七年三月に他界した辺りからくすぶり始め、やがて火が付いた。父が三七歳、私はまだ中学三年生だった。騒動の原因は、祖父が持っていた相続財産の遺産分割を巡るものであった。

当時、祖父の全財産は宅地、田、畑、山林などを含め四二、〇一二㎡余りあった。

それが祖父の亡くなった翌日、手際よくしかも隠密に宅地、山林など三五、七〇八㎡が登記簿上実弟の名義に書き換えられてしまったのだ。相続人に残された遺産は、宅地、田、畑など六、三〇四㎡だけになってしまっていた。この既成の事実を前に、残された遺産を実弟と私の父、さらに祖父側の女の相続人四人が加わり、騒動の輪は必然的に大きくなって行った。

こんなお家騒動をよそに、昭和三七年頃から東名高速道路の建設計画が持ち上がり、そ

の実現に向けた動きが加速され、現実のものとして動き出してきた。その実施計画は、茅葺屋根のおんぼろ屋敷と土地、そこで生活を営んでいる家族、その裏山にある先祖代々の墓石群や山林をそこ退け、そこ退け方式で移転させて、東京から名古屋までを開通させるものであった。

この計画に直接関わることを余儀なくされたのは私の父と、実弟と、同居はしていなかった次女であった。三人はそれぞれの移転先を探し、それぞれの場所での新たな生活をスタートさせなくてはならない羽目に徐々に追いやられて行った。当然のことながら、移転先として浮上してきたのは祖父の遺産として相続人たちに残されていた土地である。

祖母を交え、父と次女、五男の四人で何度となく話し合いを重ねたが、一向に埒が明かずに、実質はより良い土地を自分ものとしようとする争奪戦であった。話し合いは毎回部屋の仕事と壁を境に二世帯の家族が生活していた祖父側の座敷に集まって行われた。話し合いを重ねるごとに険悪な雰囲気が増すばかりであった。次女は泣き出すやら、父や五男は声を荒げるやら、悪態をつくやらで到底纏まりのつく様な状態ではなくなって行った。私は毎回この様子をもう一方の私たちの座敷で聞いていた。

祖父の他界から一〇年経ったその頃、私は中央大学の文学部に籍を置き、昭和三五年の

秋に、神田の共立講堂で開催された東京クリスチャン・クルセード「新世紀クルセード」で聖霊に導かれて救われ、既にクリスチャンになっていた。

実弟は、私利私欲のために先祖の地を実兄が相続するのを頑として拒み続け、事ある毎に父や私に罵詈雑言を浴びせかけ、喧嘩を持ち掛けてきた。私たち家族を苦境に落とし入れ続け、酷く悩まし続けた。

私は連日神様に祈り、その御心を問い続けた。

「主が手を置いて下さらなければ、すべての計略は空しいものとなります。家の健全な存立を思い、奸智と闘おうとする時に、主の許しと慈しみがなければそれもまた全く空しいものとなってしまいます。どうか主が手を置いて下さり、私たちを祝福し、安住の地へと導いて下さいますように・・・」と。

そして、遂に神様がこの祈りに応えて下さり、私に確たる許諾と信任を賜って下さる時が来た。昭和四〇年三月一日の夜、神様が御言葉をもって私に顕現して下さいだったのである。

神様は、『人を正しく治める者、神を恐れて、治める者は、朝の光のように、雲のない朝に、輝き出る太陽のように、地に若草を芽ばえさせる雨のように人に臨む。ま

ことに、わが家はそのように、神と共にあるではないか。それは、神が、よろず備わって

確かなとこしへの契約をわたしと結ばれたからだ。どうして彼はわたしの救いと願いを、皆なしとげられぬことがあるうか』(サムエル記下二三章第三節)と私を諭し、同時に嗣業の地を定めて、栄光を顕して下さった。それは瞬時に喜びと平安と賛美の極みの時となり、私の蛮勇を振るい立たせる時になった。

翌朝、私は、予てから思い定めていた田圃へ走り、その真ん中に立ち、祈りを捧げた。「神様、この場所を嗣業の地として私たちに賜って下さったことを心から感謝いたします。

私は、蛮勇を振るって、この地に神様の栄光の満ち溢れる新邸を完成させて頂きます」

新邸はその年の六月に完成した。

設計図や建設確認申請の準備、建築職人の手配、資材の調達等は予め先行して進めていたので、事の展開は速かった。しかし、土地の名義は祖父の遺産として残されたままの状態になっていた。

新邸への移転を順調に済ませ、私たちの生活は一変して喜びと平安と感謝に満ちた日々となった。住み慣れた茅葺屋根のおんぼろ屋敷の取り壊し、墓地の移転も無事に済ませた。だが、遺産分割の協議が破談に終わったため、その後遺症は酷かった。実弟の怒りと憤りは頂点に達し、嫌がらせや誹謗中傷は日常茶飯事となった。

東名高速道路は、昭和四四年五月に全線開通した。その後も未解決の遺産分割の案件は解決を見ず、試練と忍耐に立ち向かう日々が長く続くことになった。

私が、平塚市役所を定年退職し、裁判所に遺産分割調停申立をするまでの間、総てのことに神様が私の側に立っていてくれた。

この間に、お家騒動を引き起こした関係者、祖母、父、次女、実弟の四人は皆他界した。私の母は平成三年に、父は平成一三年に、新邸での恵まれた日々を過ごし、苦難と波乱万丈に満ちたその生涯を閉じた。

私は、平成一四年三月に、三四年間勤務した平塚市役所を定年退職した。熟慮の末、平成一五年七月、静岡家庭裁判所沼津支部に遺産分割調停申立書を提出した。遺産分割の対象となった相続人（当事者）は三〇名に膨れ上がっていた。

調停結果は、新邸の敷地面積の三・五倍の土地（六一七㎡／一八六・坪）が私に与えられ、神様からの嗣業地となった。それぞれの相続人（当事者）も満足のいく結果を得た。

早春譜

春爛漫の八幡山に咲き誇る満開の桜の中で、希望と歓喜に満ち溢れて憧れの神奈川県立小田原高校での学園生活を始めたのは、昭和三二年の四月だった。高校は、小田原市と相模灘を一望できる八幡山にあった。

学園生活にも慣れ染めて来た頃、昼休みの自由時間に榎の木の緑陰で学生達が三々五々集まって「音痴コーラス」に興ずるひと時がありました。私も毎回引かれるようにしてその集会に出ていた。

この集会で、ロシア民謡の「カチューシャ」やホオレスタの「山男の歌」、小田原高校の「逍遙歌」などを覚え、事ある毎に口ずさむようになった。なかでも「逍遙歌」は私の最も好きな歌で私の人生に決定的な影響を与える歌となった。歌詞は次のようなものであった。

一 さやかににおう榎の香の 樹の間に仰ぐ箱根山
清らの歩み悠久の 「真理」をめざしいざ往かん
いばらの道は遠けれど 運命を負いて学びなん

二 ああ繚乱の花散りて 八幡すでに秋逝くも

熱き血潮に限りなく 「愛の絆」を編みゆかん

「バベルの塔」の混濁に 英知のかがり火と燃えん

歌詞の中の「真理」、「愛の絆」、「バベルの塔の混濁」、「英知」の言葉になぜか強く心が惹かれた。

そんなある日、ふだんあまり言葉を交わしたことの無い同級生が、「アメリカから来た宣教師が小田原駅の近くで英語の聖書研究会を開いているので、一緒に行かないか」と誘いの言葉を掛けてきた。私はネイティブであることに心引かれ、その誘いを即座に快諾した。

その日は、金曜日の夜だったと記憶するが、ミス・マクドナルド女史の聖書研究会には、小田原高校の男子生徒が一二、三人と、立教大学の男子学生一人が集まっていた。それに通訳として箱根中学校の英語の女教師が一人おられた。

その研究会でマクドナルド女史の口から出たのは、

「神がこの天地を創造した・・・」

「キリストは人々の罪を贖うために十字架に掛かって死んだ・・・」
などという、今までに聞いたこともない言葉だった。

私の拙い理性と想念とは間髪をいれず即座にこれらの言葉に反発した。

「神がこの天地を創造した・・・」に対しては、「宇宙を支配しているのは英知・・・」。

「キリストは人々の罪を贖うために十字架にかかった・・・」に対しては、「私ならイエスを十字架にはかけない。そのような非人道的なこととはしない・・・」と。

そして、何よりもこの世で一番大切なことは、「愛の絆」を編み続けてゆくことだとう確信だった。

数日後、わたしは、「キリスト教をぶっ潰してやる！」という意気込みで分厚い聖書を買って求め、「神がいるのか、いないのか・・・」を追い求めつつ、一心不乱に聖書を読み続けた。

創世記から始まって、エレミヤ書、イザヤ書・・・と読み進んでいくうちに「神がいるとか、いないとか」の概念は一気に吹っ飛んでしまった。

「いるとか、いないとか」の問題ではなく、「神は歴然として存在し」、「全宇宙と世界を支配している」ことに疑う余地の無いことに気付かされた。

ミス・マクドナルド女史の聖書研究会に偏見と反発心を抱きながらも欠かさず出席していた私は、ネイティブの英語を身に着けることには魅力を感じていたが、どうしてもキリスト教のフィールドに入っていくことは出来ず仕舞いのまま、高校を卒業する時期を迎え

ことになった。

しかし、思春期の異性への思慕やそれまで考えたこともなかったキリスト教へのこだわり、文学青年への覚醒等々により、高校生活の中途から狂い始めた勉学への恭順の歯車は、まともな大学への受験など考えられない事態を招来させた。

私は、両親の驚嘆と失望、苦悩を重々承知の上で、その年の大学受験を意識的に回避しなければならぬ状況を両親に打ち明け、一年間の浪人生活を送る承諾を貰った。

昭和三十五年の春、私は計り知れない寂寥感と昏迷感に満ちた心身の中に、一抹のキリスト教への期待感を抱いて上京し、蒲田の伯母の家に下宿し、駿河台予備校に通うことになった。

ある日、御茶ノ水駅から予備校に向かう歩道で、キリスト教の特別伝道集会のビラを配っている一人の女性大学生の姿を見かけた。私は、彼女が差し出してくれたビラを何の抵抗もなく受け取り、女子学生に軽く挨拶の仕草をしながら、すつとビルの中に入って行った。

この経験を機に、以後私は頻繁にこの「御茶ノ水学生キリスト教会館」（現御茶ノ水クリスチャンセンター）に出入するようになった。

その年の秋、一〇月一七日から二二日まで、神田の共立講堂で「東京クリスチャン・ク

ルセード」が開催されたので、躊躇することなくその大会に参加した。

初日の夕方、開催会場へ少し早めに行くと、会場内では大会を成功させるべく超教派の大勢の牧師や宣教師、信徒たちが熱心な激しい祈りを捧げている最中であった。

熱狂にも似たその叫び声が満堂に響き、轟きわたっていました。

聖霊よ、来て下さい！聖霊よ、降って来て下さい！御救いのみ業をなして下さい！

聖霊よ、来て下さい！！！！聖霊よ、降って来て！！御救いのみ業をなして下さい！

聖霊よ、来て下さい！聖霊よ、降（くだ）って来て下さい！

御救いのみ業をなして下さい！

熱い祈りの後に、連日説教者であるカナダのオズワルド・スミス博士が壇上に登り、火の霊（たま）が燃えるような説教が始まり、その福音説教は、終始私の心を捉（とら）え続け、感動と感銘を与えてくれた。

その中に私の入信、この世からのボーダーを越えてキリスト教の世界に飛び込むことを決心させた決定的な「ことば」があった。

「神社仏閣の石碑や祀られている神々、自宅にある仏壇の位牌やご本尊、神棚の木の木端

(こつぱ)が、あなたに話しかけてくれますか？

あなたの望みに応えてくれますか？ あなたの問題を解決してくれますか？

あなたの重荷を荷ってくれますか！ 平安を与えてくれますか！

喜びを与えてくれますか！ 生ける真(まこと)の神を信じなさい！

イエス・キリストをあなたの救い主として受け入れなさい！

主イエス・キリストにすべてを任せて従って行きなさい！」という「こつぱ」だった。

あゝ、その時、私は聖霊を授かり、心の中に燃え盛る光を賜った。

輪 舞

一旦は中退した、中央大学の文学部・フランス文学科に再入学したのは、昭和四〇年の春だった。

東京クリスチャン・クルセードで、すでに救いの体験をした私は、心身共に一変していた。社会に出る前に、正しい知識をきちんと身に付けようと思った。その専門課程を修了し、勢い余って中央大学法学部政治学科に学士入学した。現実の社会生活に必要な知識をそれなりに身につけて、中央大学を卒業したのは、昭和四四年の三月だった。

その年の一〇月に、神奈川県平塚市役所に就職した。

その職域と担当した主な所掌事務は次の通りだ。

昭和四四年一〇月 平塚市市民センター主事となる。

結婚式の司会を担当する。凡そ一〇〇〇組に及ぶカップルの司式を行う。

昭和四七年四月 企画部企画課事務吏員 主任となる。

平塚市総合計画の策定 行政水準指標、コミュニティ計 画等の策定 特命事項の企画及び調整（地下水塩水化対策、地盤沈下対策、ごみ処理対策、相模川高度利用計画の推進、市民憲章の制定、相模川河川敷利用計画の策定、宮が瀬ダム建設計画等への対応事務等）。

昭和五五年五月 下水道部業務課 事務吏員となる。

水防計画の策定 水防団活動・訓練 災害対策本部設置

昭和五六年一〇月 平塚市博物館事務職員 主査となる。

歴史、民俗、美術、天文、地質、生物担当各学芸員の補助事務 美術館建設計画策定
平塚市市史編纂事務。

昭和六一年一〇月 環境部健康課事務吏員 企画担当主査となる。

平塚市保健計画の策定 平塚市医師会、平塚市歯科医師会との連絡調整事務等。

平成三年 五月 都市部湘南海岸整備推進室 整備推進担当副主幹となる。

湘南海岸整備の実現化（平塚の海岸を泳げる海にする）事務。

海浜用水洗トイレの設置。

平成四年 四月 河川下水道部水政課 整備推進担当副主幹となる。

湘南なぎさプランの策定（神奈川県と共同策定）と計画の実現化を企画 平塚海岸ビ
ーチパークの管理・運営

ビーチバレー、ビーチサッカの普及・振興。

平成六年 四月 市民部女性行政推進室 室長代理となる。

男女共同参画社会実現に向けた啓発・普及活動の推進。

平成七年 四月 農業委員会事務局 事務局長代理兼農地係長となる。

農地法に基づく許認可事務、違法行為の取り締まり、違法農地の勧告・是正事務。

平成九年 四月 道路部道路建設課 主幹 道路部参事となる。

都市計画道路完成に向けた事務。用地買収、補償事務。

平成一四年 三月 定年退職。

企画部企画課に在籍している頃だった。妹を通してお見合い話があった。

それまでに、私は一六回お見合いをしたが、すべてが纏まらず仕舞いで終わっていた。当時、私の妹は、南足柄市の富士ファイルムの研究所に勤めていた。その同僚女性が、事ある毎に、妹に、「お兄さんは、幾つなの。学校はどこを出ているの。お勤め先は、などなど」根掘り葉掘り聞いていたようだ。

時満ちて、その女性は、「私の親戚に素敵な女性がいるんだけど。」と言って、お見合い話を薦めてきたそうだ。お見合いの相手は、東京の新橋にある酒屋の長女だった。私は、その女性と二度会った。礼を尽くし、三度目にこの話をうまく断るつもりでいた。

ところが、三度目に会った時、事態は一変した。

前の晩、職場の同僚と深酒に酔いしれてしまい、真夜中過ぎに、大学時代の友人の家に泊めもらう破目になってしまった。翌日の朝、ひどい二日酔いに襲われ、到底、彼女に会いに行けるような状態ではなかった。それでも、友人と若奥さんに励まされ、東海道線の真鶴駅から東京に向かった。向かう途中、電車のトイレに出たり入ったりして、激しい嘔吐と吐気、悪寒などと闘わなければならなかった。

東京駅に着き、青白い顔をし、意識が朦朧とした状態で、フラフラした足取りでホームの階段を降りて行った。改札口を通り抜け、八重洲口の地下街へ降りて行った。私のこの

体たらくな姿を見たら、彼女の方から破談にするだろうと考えながら、歩を進めていった。再会を約した喫茶店に入ると、彼女はすでにそこに来て居た。

彼女は、私の放蕩三昧の風体を見るなり、とっさに「どうしたんですか、すぐに救急車を呼びましょうか！」と言った。「私には構わないで、何をしたらよいのか言って下さい。お水でも飲みますか。ジュースでも注文しましょうか。」と問い続けた。

私は、彼女から身に沁みる介抱を受けながら、心の中で、「彼女と結婚しよう！」と思った。『善きサマリヤ人』の寄り添いを感じたのだ。

驚きの様子はあつたが、嫌な顔一つしなかつた彼女に惚れ込んでしまった。家路につき「結婚を前提としたお付き合いをさせて頂きたい」と関係者に伝えた。

彼女と結婚したのは、昭和五〇年二月一日だった。

市民センターから企画課に異動する内示があつた時、館長が私に言った言葉が忘れられない。「企画課は、陽あたりのいいところだ」と、羨むような、激励する様な口調で言った。そこは市長側近の部署だったからである。そこは、市政の全般を鳥瞰しつつ、自分の能力と資質を存分に発揮できる職域で、職員ならば、誰でも憧れる職場だったのだ。

企画課から他の部署に異動しても、特命を受けたスタッフとして企画・調査の任に当つ

た。平塚市を舞台に、実直で善良な市民と共に、友愛の輪を繰り広げた。もちろんそこには心をひとつにした素晴らしい職員のチームワークがあった。未来志向と、希望と夢、不屈の精神が、都市（まち）づくりの力としてあった。

輪舞の成果は、一つ一つ実を結んで行った。平塚海岸は泳げる海岸となった。ビーチ巴厘はオリンピック種目になった。ゴミの分別収集は、全国に先駆けてその方式を確立し、そのモデルとなった。相模川高度利用計画は、漁業振興の近代化、農業用水利の整備、向上、安全で安定的な飲料水の確保を齎した。河川敷は、公園やスポーツ広場に変貌した。美術館も完成した。念願の都市計画道路も立派に完成した。

愛唱聖句

*ヨハネによる福音書第三章第一六節

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。

それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

*詩篇第一篇第一節〜第三節

悪しき者のはかりごとにあゆまず、罪びとの道に立たず、

あざける者の座にすわらぬ人はさいわいである。

*詩篇一一八篇八、九節

主に身を避けることは、人に信頼するよりもよい。

主に身を避けることは、君主たちに信頼するよりもよい。

愛唱賛美歌

*讚美歌 三一二番

*いつくしみふかき

*聖歌 四七二番

*人生の海のあらしに